

仮名

本阿弥切古今和歌集〔国宝〕

伝 小野道風 平安時代・十二世紀後半

教科書 44ページ 京都国立博物館蔵

読み

つゆ奈 露ならぬ 心を人におきそめて かせ
不久 不 久
ふくごにもものおもひぞつく

『古今和歌集』 589

歌の意味

露ではなく、心を(恋しいあの)人に置き始めてからは、風が吹くたびに(露がこぼれ落ちるのではないかと)心配でならない。同じように、少しとはいえない恋心をあなたに寄せ始めてからは、あなたの恋のうわさを聞くたびに、あなたのことが思われてならないことよ。

意 だいしらず さかのうへのこれのり
日越九不の山□さくら花まなく
遅 我こひをくらふの山□さくら花まなく
ちるともこさはまさらじ

『古今和歌集』 590

年 可 於本 利
むねをかのおほより
不遊可者 者
ふゆかはのうへはこほれる我なれや
多尔可連 日多
したにながれてこひわたるらん

『古今和歌集』 591

多 多
たゞみね
多幾 世尔年
たぎつせにねざしとゞめぬうき
久佐尔 支多
くさにうきたるこひも 我はするかな

『古今和歌集』 592

題知らず 坂上是則

私の恋心をの桜の花と比べると、花は途切れる間もなく散っているが、その(散る桜の)濃さは(私の恋心に)勝ることはあるまい。

宗岳大頼

冬の川の表面が凍っているように、表情に出さない私なのだろうか。氷の下では水が流れているように、自然に泣かれて、あの人をずっと恋い続けることだろう。

壬生忠岑

激しい浅瀬に根を差してとどまることをしない浮き草のように、(激しくとも)不安定な恋をも私はしているのだなあ。

